

## 出品作品リスト

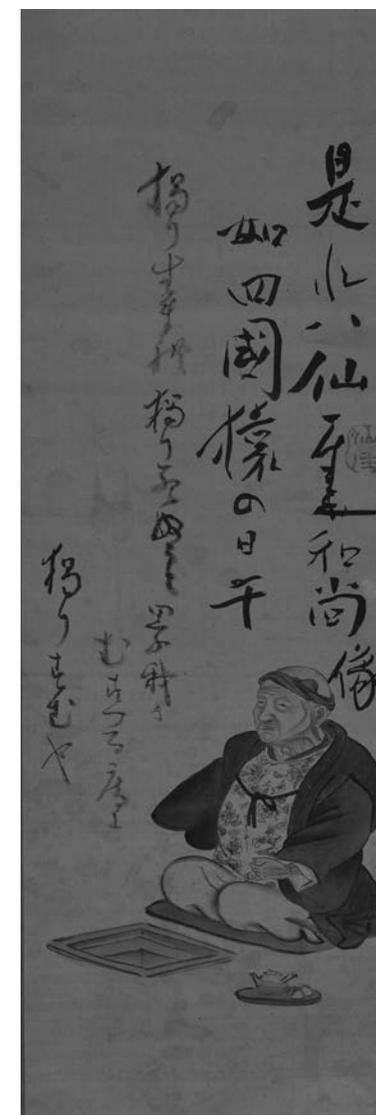
・都合により展示作品を変更することがあります。

No	作品名	作者名	品質	時代世紀	コレクション
1	仙厓和尚像	山崎朝雲(1867-1954)	木造彩色	昭和10年(1935)	九州大学文学部蔵 (中山森彦旧蔵)
2	仙厓和尚図	齋藤秋圃(1769-1861)画、 仙厓義梵(1750-1837)賛	絹本着色	江戸時代 19世紀	博多百年蔵コレクション
3	円相図	仙厓義梵(1750-1837)	紙本墨画	江戸時代 19世紀	小西コレクション
4	円相図	仙厓義梵(1750-1837)	紙本墨画	江戸時代 19世紀	石村コレクション
5	寒山拾得図	仙厓義梵(1750-1837)筆、 太室宗宸(1763-1847)賛	紙本墨画	江戸時代 19世紀	一般古美術資料
6	寒山拾得図	仙厓義梵(1750-1837)	紙本墨画	江戸時代 19世紀	石村コレクション
7	布袋図	仙厓義梵(1750-1837)	紙本墨画	江戸時代 19世紀	博多百年蔵コレクション
8	香巖撃竹図	仙厓義梵(1750-1837)	紙本墨画	江戸時代 寛政9年(1797)	小西コレクション
9	臨濟栽松図	仙厓義梵(1750-1837)	紙本墨画	江戸時代 19世紀	三宅コレクション
10	大燈国師図	仙厓義梵(1750-1837)	紙本墨画	江戸時代 19世紀	三宅コレクション
11	瀉仰問答図	仙厓義梵(1750-1837)	紙本墨画	江戸時代 19世紀	三宅コレクション
12	恵比寿図	仙厓義梵(1750-1837)	紙本墨画	江戸時代 19世紀	小西コレクション
13	森六蔵宛書簡	仙厓義梵(1750-1837)	紙本墨書	江戸時代 18-19世紀	石村コレクション
14	内典外典書籍目録貼交屏風 2曲1双のうち1隻	仙厓義梵(1750-1837)	紙本墨書	江戸時代 18-19世紀	石村コレクション
15	月歌図	仙厓義梵(1750-1837)	紙本墨画	江戸時代 19世紀	小西コレクション
16	尾上心七早変わり図	仙厓義梵(1750-1837)	紙本墨画	江戸時代 19世紀	一般古美術資料
17	観音菩薩図	仙厓義梵(1750-1837)	紙本墨画	江戸時代 文化11年(1814)	九州大学文学部蔵 (中山森彦旧蔵)
18	行基大土図	仙厓義梵(1750-1837)	紙本墨画	江戸時代 19世紀	石村コレクション
19	蜷子和尚図	仙厓義梵(1750-1837)	紙本墨画	江戸時代 文政3年(1820)	三宅コレクション
20	絶筆の碑図	仙厓義梵(1750-1837)	紙本墨画	江戸時代 19世紀	石村コレクション
21	家訓	仙厓義梵(1750-1837)	紙本墨書	江戸時代 19世紀	石村コレクション
22	玄海一覽	仙厓義梵(1750-1837)画、 曇栄宗嘩(1750-1816)賛	紙本墨画	江戸時代 文化14年(1817)	博多百年蔵コレクション
23	太宰府十二景	仙厓義梵(1750-1837)	紙本墨画	江戸時代 19世紀	石村コレクション
24	宝満山図	仙厓義梵(1750-1837)	紙本墨画	江戸時代 19世紀	小西コレクション
25	竈門山詩	仙厓義梵(1750-1837)	紙本墨書	江戸時代 文化11年(1814)	石村コレクション
26	博多湾図	仙厓義梵(1750-1837)	紙本墨画	江戸時代 19世紀	小西コレクション
27	筥崎詩	仙厓義梵(1750-1837)	紙本墨書	江戸時代 19世紀	石村コレクション
28	長崎詩	仙厓義梵(1750-1837)	紙本墨書	江戸時代 19世紀	石村コレクション
29	釈迦三尊図	仙厓義梵(1750-1837)	紙本墨画	江戸時代 19世紀	石村コレクション
30	文殊菩薩図	仙厓義梵(1750-1837)	紙本墨画	江戸時代 19世紀	石村コレクション
31	観音菩薩図	仙厓義梵(1750-1837)	絹本墨画	江戸時代 19世紀	石村コレクション
32	三社図	仙厓義梵(1750-1837)	紙本墨画	江戸時代 19世紀	石村コレクション
33	牛図	仙厓義梵(1750-1837)	紙本墨画	江戸時代 19世紀	小西コレクション
34	虎図	仙厓義梵(1750-1837)	紙本墨画	江戸時代 19世紀	石村コレクション
35	猿図	仙厓義梵(1750-1837)	紙本墨画	江戸時代 19世紀	小西コレクション
36	猪図	仙厓義梵(1750-1837)	紙本墨画	江戸時代 19世紀	小西コレクション
37	子孫繁昌図	仙厓義梵(1750-1837)	紙本墨画	江戸時代 19世紀	石村コレクション
38	農耕図	仙厓義梵(1750-1837)	紙本墨画	江戸時代 19世紀	石村コレクション
39	玉せせり図	仙厓義梵(1750-1837)	紙本墨画	江戸時代 文化11年(1814)	三宅コレクション
40	福神図	仙厓義梵(1750-1837)	絹本墨画	江戸時代 19世紀	博多百年蔵コレクション

## 仙厓展

会期 2022年12月20日|火|-2023年2月19日|日|

会場 古美術企画展示室



出品No.2 齋藤秋圃筆、仙厓義梵賛《仙厓和尚図》

仙厓義梵(1750~1837)は、日本最初の禅寺である博多・聖福寺の住職を務めた禅僧です。書画を通して禅の教えを人びとに分かりやすく伝えたことから、「博多の仙厓さん」と呼ばれ慕われました。

本展では、仙厓さんの生涯と画風を紹介するとともに、ジャンルごとに作品をご覧いただき、彼の多彩な作画活動に触れていただきます。

## 仙厓さんの2つの顔

親しみやすい書画を通して禅の教えを分かりやすく伝えた仙厓さん。私たちは肖像画や彫刻を通して、その姿を知ることが出来ます。

齋藤秋圃による《仙厓和尚図》(作品2)は、囲炉裏の側に座ってくつろいだ様子の仙厓さんを描いたもの。にっこりと微笑むその表情は親しみやすさを感じさせます。

一方、山崎朝雲による《仙厓和尚像》(作品1)はどうか？花柄の服に青いちゃんちゃんこを羽織った姿は作品2と同様ですが、その表情は厳格なもの。ストイックに修行に励んだ仙厓さんの一面が垣間見えるようでもあります。

このように、仙厓さんは親しみやすさと厳しさの両方を併せ持った人物と捉えられていたようですが、このことは彼の描く書画にもあてはまります。

例えば、2点の円相図を比べてみると、作品4は「これくふてお茶まひれ(これでも食べてお茶でもどうぞ)」とユーモアあふれる親しみやすい内容であるのに対して、作品3では、長くて内容も難しい賛(コメント)が寄せられています。

また、寒山拾得図でも、作品6のように大らかな筆遣いで描かれるものもあれば、作品5のようにかっちり描かれるものもあります。

同じ人物が描いた書画において、どうしてこれほど作風が異なるのでしょうか？結論から先に申し上げると、描かれた時期の違いに起因します。このことを確認するため、仙厓さんの生涯と画風の変遷を駆け足でたどってみることにしましょう。

## 仙厓さんの生涯と画風の変遷

寛延3年(1750)に美濃国(岐阜県関市武芸川町)に生まれた仙厓さんが九州へやってきたのは、天明8年(1788)のこと。翌寛政元年(1789)、仙厓さんが40歳の時に聖福寺の住職に就任しました。

仙厓さんがいつから絵を描き始めたのかはよく分かりませんが、ひとまず、聖福寺の住職に就任した40歳頃をひとつの契機と見ておきたいと思います。仙厓さんの初期の画風をうかがう手がかりになるのが、《布袋図》(作品7)です。後年の奔放な画風とは異なり、表情などが密に描き込まれているのが印象的な作品です。福岡藩のお抱え絵師であった尾形家に伝わる下絵の中に、本作と図柄が一致するもの(参考図)があることが知られており、仙厓さんが、プロの絵を写すことで画技を磨いていたことが分かります。



参考図《布袋図》(尾形家絵画資料)福岡県立美術館蔵

《香巖撃竹図》(作品8)は、寛政9年(1797)、仙厓48歳の時に描かれたもので、制作年が分かる中では最も古い作品です。本作は、掃除中に小石が竹にあたった音を聞いて悟りを得たという香巖智閑(?~898)の故事を描いています。このような禅僧が悟りを得た逸話にちなんで絵を禅機図といいますが、仙厓さんの初期の作品の多くはこの禅機図(作品9~11)です。総じて、人物の表情が暗く沈んでおり、親しみやすさを感じさせない作風に特徴があります。禅機図は自身の悟りを示したり、弟子を指導するために描かれるものですから、親しみやすさよりも厳しさが求められたのでしょう。

《恵比寿図》(作品12)のようにからっとした笑顔が印象的な明るい作品もないわけではありませんが、基本的には、住職時代の仙厓さんは厳しい画風の作品が多いです。そもそも、住職時代の仙厓さんには書画の制作以上に重要な仕事がありました。その1つがお堂の復興です。聖福寺は日本で最も最初に作られた、由緒正しい禅寺です。しかし、仙厓さんが住職に就任した当時は財政的にも困窮しており、お堂が荒廃していました。仙厓さんがお堂の復興に尽力したことは様々な史料から分かっており、例えば、《森六蔵宛書簡》(作品13)は当時、町奉行を務めていた森六蔵に対して、客殿の復興のための資金を藩から支出してもらうようお願い出たものです。

また、住職時代の仙厓さんの事績をうかがう上で見逃せないのが《内典外典書籍目録貼交屏風》(作品14)です。これは、仙厓さんの蔵書目録を屏風に貼り込んだもの。仏教関係(内典)、仏教以外(外典)など、様々な書籍を読んで貪欲に勉強していた仙厓さんの姿が目に見えそうです。

このように寺務や勉強など多忙を極めていた仙厓さんの転機となったのが、文化8年(1811)、62歳で住職を隠退し、翌年(作品15)に移住したことです。この頃から仙厓さんの画題や画風に変化が

表れ始めます。最も分かりやすい変化としては、禅宗以外の画題(作品16)も手掛けるようになったこと。住職を隠退して、禅宗の知識を持たない市井の人びとに向けて書画を制作するようになったことが、その要因と考えられます。

当時の仙厓さんの思いをうかがう手がかりになるのが《観音菩薩図》(作品17)です。住職時代とは異なる、明るい表情が印象的な作品ですが、注目すべきは上部に記された賛文です。そこには、他人の利益のために行ったことは全て、観音菩薩の慈悲の心に通じるのだ、という内容が記されています。ここでいう他人が、お坊さんだけでなく博多の地で暮らす人びとを含んでいることはいまでもありません。つまり、住職の隠退をきっかけに仙厓さんは弟子の指導や自身の宗教観の表明ではなく、博多で暮らす人々のために書画を制作するようになっていったのです。

《行基大師図》(作品18)も当時の仙厓さんの作画に対する思いが良く伝わる作品です。行基とは奈良時代の高僧で、土木工事をはじめ様々な公共事業に取り組んだことから行基菩薩と呼ばれ、慕われました。仙厓さんもある時期から菩薩を意味する卍の字を崩した花押(サイン)を用いるようになります。他者を救済する菩薩行の一環として作画に取り組んでいたことが分かります。

《蜆子和尚図》(作品19)は、仙厓さんが71歳の時の作品。それまでの作品とは異なり、奔放に筆を走らせたような画風に大きな特徴があります。「仏を丸呑みにしてやるぞ」という過激な賛文も相まって、見る者に強烈なインパクトを与えます。70代は仙厓さんの画業が最も充実していた時期です。73歳の時に描いた代表作《寒山拾得豊干禅師図屏風》(幻住庵蔵)において「世画有法匡画無法(世の中の絵には法があるが、私の絵には法などない)」と宣言するに至ります。

この「無法」こそが仙厓作品の到達点といえるもので、きまりに捕らわれない自由な筆遣いで描かれた作品は大いに人気を博しました。仙厓さんが詠んだとされる狂歌「うらめしや我が隠れ家は雪ちんかくる人ごとに紙置て行く」(作品21)からもその人気のほどがうかがわれます。

相次ぐ揮毫依頼にたまりかねたのか、天保3年(1832)83歳の時に絶筆と刻まれた石碑を建てて、絵を描かないことを宣言します。ですが、絶筆の碑を描いた作品(作品20)が残ることからも想像できるとおり、この絶筆宣言は失敗に終わったようです。88歳でその生涯を終えるまで、博多で暮らす多くの

人びとに書画を描き与えました。

## 旅する仙厓さん

ここからは、仙厓さんの作画活動について、ジャンルごとに見ていくことにしましょう。聖福寺の住職を隠退した仙厓さんは様々な土地を訪れ、景色を描き、気持ちを詩にしたためました。特に好んで訪れたのが、太宰府の名山である宝満山(作品23、24、25)です。標高829mと決して低い山ではありませんが、仙厓さんは65歳で初めて踏破して以来、度々登っています。

仙厓さんが訪れた場所は糸島(作品22)や箱崎(作品26、27)など近隣の地が多いですが、長崎(作品28)をはじめ、遠方にも足を運んでいたようです。

## ほっこり神仏

仙厓さんは生涯を通して多くの宗教画を描いています。(作品29~32)その多くは、うやうやしく飾るような厳粛な雰囲気ではなく、どこか親しみやすさを感じさせます。自宅に飾って、ふとした時に手を合わせたいような、ほっこりとさせてくれる作品ばかりです。

## ゆるかわアニマル

動物画(作品33~36)は仙厓さんの作品の中で最も人気のジャンルでしょう。干支の動物も多く含んでおり、年賀状代わりに描かれたのでは？と想像したくなる作品もあります。軽やかな筆遣いで描かれた愛らしい動物からは、仙厓さんが動物に向けた温かなまなざしがひしひしと感じられます。

## 博多の仙厓さん

博多の人びとの求めに応じて多くの書画を描いた仙厓さん。中には描かれた時のエピソードを想像したくなる作品もあります。やんちゃな子どもと困り顔のお父さんの姿を描いた《子孫繁昌図》(作品37)は、家庭の悩み相談に対する返答として描かれたものでしょうか？仕事終わりの農夫を描いた《農耕図》(作品38)は農民の子である仙厓さんが、彼らを頼もしく思っていたことをうかがわせます。

博多のお祭りを描いた作品(作品39、40)もあり、当地での暮らしを心から楽しんだ様子も伝わります。

(学芸員 宮田太樹)